

「百聞は一見にしかず」

吉田町牧之原市広域施設組合消防本部 植木崇文

突然ですが、イメージしてください。まず、片方の手を上げ、上げている手の反対側の耳を摘まみます。次にもう片方の手で肩甲骨を触ります。

イメージ出来ましたか？実際のポーズはこれです。

「聞く」と、実際に「見る」では、理解力に大きな差が生まれます。このことを諺で「百聞は一見にしかず」と言います。私は数年前に、この諺の意味を深く考えさせられました。

私が通信指令員として勤務していた時の事です。60歳代男性のC P A 事案を入電しました。私は、マニュアル通りに「胸骨圧迫を行ってください。」と伝えました。通報者は胸骨圧迫という言葉を知らなかったため、「心臓マッサージ」という言葉に変えて、救急隊が現場到着するまで口頭指導を続けました。そして、一仕事を終え、休憩していた私は「お前、どんな口頭指導してんだ！」と、救急隊長から怒鳴られました。私は何が起きたのかさっぱり分かりませんでした。隊員から「胸を優しく撫でていたよ。」と聞かされ、啞然としました。「心臓マッサージ」という言葉を使ったため、心臓を優しくマッサージすると誤解されてしまったのです。この時初めて口頭だけで伝えることの難しさを痛感したと同時に、市民に解りやすいC P Rの普及方法がないかと考え始めました。

その後も、講師として救命講習に積極的に参加しましたが「胸骨圧迫、A E D、人工呼吸」など普段聞き慣れない言葉が飛び交う講習では、口頭での説明は、やはり、理解されず忘れられてしまうようでした。一方、映像や模範演技を見せてから、実習をしてもらうと、すぐに行動に移すことが出来ることを身を持って体験しました。つまり「聞く」と「見る」とでは、非常に大きな差があり、「見る」という「経験」がいかに重要であるかがわかったのです。

しかし、この「経験」をすることが出来るのは、救命講習に参加した一部の方だけです。救急要請が多い年配の方々に「救命講習に参加してください。」と訴えても、自分達が参加して欲しい対象であるということに気付かない方が非常に多いです。核家族化した現代社会には、老夫婦の二人暮らしが急増しています。誰でもバイスタンダーになる可能性があることを訴え、積極的にCPRを普及させる必要があります。

そこで、老若男女問わず毎日目にする、CMを使っただけの普及を提案します。CPRの映像を流し「見る」という経験をしてもらいます。救命が必要な場面に遭遇した際、何度もCMを見ていれば「あ、あのCMだ」とすぐに思い出すはずで、完璧な手技が出来なくても、口頭指導の理解力は格段に高まり、早期に有効なCPRが実施出来ます。また、今まで敷居が高かったCPRを大衆的なものに下げる効果も期待出来ます。結果として救命講習に興味を持つ人が増え、講習の参加率向上、バイスタンダーの増加、救命率の向上へと繋がっていきます。

私は東日本大震災時にお馴染みとなったCMで、公共の広告機構があることを知りました。この組織は「世のためになるメッセージを、『広告』という形で発信しよう。」という理念で運営されています。私たち消防職員も、救命率の向上という重要なメッセージを広告という力を借りて世の中に発信していきましょう。

「百聞は一見にしかず」